



TITLE:

Take in Open Sight" : The Faerie Queene 第6巻における恋愛のプ ライバシー

AUTHOR(S):

竹村, はるみ

CITATION:

竹村, はるみ. Take in Open Sight" : The Faerie Queene 第6巻における恋愛のプライバシー. Zephyr 1994, 7: 59-74

ISSUE DATE:

1994-01-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/87533>

RIGHT:

“Take in Open Sight”: *The Faerie Queene*

第6巻における恋愛のプライバシー

竹村 はるみ

15世紀から16世紀にかけて、プロテスタントは中世教会の結婚に関する教会法規定に数々の疑問点を見出し、婚姻制度の見直しはその改革要因の一つとなっていた。¹⁾ 婚姻手続きの組織化、及び教会による統制を目指したプロテスタントの異議の矛先は、先ず旧制度における秘密結婚の合法性に対して向けられた。結婚の秘蹟 (sacrament) 性を重視した従来の教会法では、婚期に達した男女は原則として本人の合意のみで結婚することができた。婚姻は神の成すところであるという考えのもとでは、例え結婚が本人のみにより証人なしに行われても、誓約が床入りによって完了 (consummate) された場合、それはもはや分かっことのできない絆であると考えられたためである。この結果、親の承認を経ない秘密結婚は後をたたず、プロテスタントはこうした婚姻法を青少年の無思慮な結婚を助長するものとして激しく糾弾した。改革派の秘密結婚反対の運動は、1604年の英国国教会法に反映され、そこでは教会における結婚と結婚予告の公表 (banns) が義務づけられ、式が行われる時や場所に関する厳しい制約が取り決められた。²⁾ Philippe Ariès の言う、“the business of publicizing marriage” が教会によって推進され、中世にあってはあくまで私的な慣例とされた結婚は次第にその公表性 (publicity) を要求されるようになっていったのである。³⁾

この事情をふまえて Edmund Spenser の *The Faerie Queene* 第6巻を検討すると、詩人の恋愛観の新たな側面が明らかになってくる。批評家達は一致して、この巻における public/private のテンションを指摘してきた。礼節 (courtesy) の騎士 Calidoreは、巻の半ばで妖精の女王に誓った使命

を放棄し、Pastorella との恋に生きるべく牧人の生活に入る。Harry Berger Jr. によれば6巻は、詩人の “an attempt at once to cope with justice at the personal and social levels” であり、Richard Helgerson は “conflict between private inspiration and public function” を論じる。⁴⁾ この拮抗を反映するかのように、第6巻で表される礼節の評価も大きく二つに分かれる。これを公德と解釈する批評家にとっては、後に再び宮廷から課せられた使命の達成に赴く Calidore は、私事を公務の犠牲にして国家に尽くす Cicero 型英雄の権化となる。⁵⁾ 一方、一時とはいえ愛のために公務を捨てる Calidore に注目すれば、Spenser は心の内面や私的な空間を重視したプライバシー擁護者となる。⁶⁾ 本稿では、第6巻で顕著に見られる秘密結婚の問題に焦点を当て、当時の社会事情との比較検討を通じて、恋愛における公私の葛藤に対する詩人の立場を考察していきたい。

I

Calidore は旅の途中で、Priscilla と Aladine という、親にその結婚を反対されている若い恋人達に会う。貴族である Priscilla の父親は、彼女をさる裕福な男性と結婚させようとしていたが、Priscilla は身分の低い騎士 Aladineを愛し、二人は父親の目を盗み森で逢瀬を重ねていた。二人が「森の中の人目につかぬ一角」‘a couert glade / Within a wood’ (VI. ii. 16)⁷⁾ で密かに落ち合った折、別の騎士が偶然そこを通りかかる。Priscilla の美貌に目をつけた騎士は Aladine が妬ましくなり、彼女を力づくで奪おうと、油断していた Aladine に切りかかり重傷を負わせる。恋人が倒れたのを見るや、Priscilla は恐怖に駆られて茂みに身を隠す。

このエピソードは、第4巻に登場する Æmylia の苦難を想起させる。Æmylia も Priscilla と同様、身分の低い従者を愛し、彼と駆け落ちをしようとして森の中で待ち合わせるが、約束した場所に恋人はいず、森に住む淫乱な野蛮人「欲情」(Lust) にさらわれ監禁される。Mark Rose は、この挿

話を、親の意志に背いた結婚をすることにより生じる危険を若い女性に説いたものと解釈している。⁸⁾ *Æmylia* と、*Aladine* との関係を「永遠の絆で結ばれた」‘for euer bound’ (VI. ii. 43) ものと主張する *Priscilla* の第一の共通点は、二人とも親の同意を経ずに結婚の約束を交わしているという点である。イギリスでは他の新教国と異なり、カトリック教から離脱した後も結婚は引き続き秘蹟として扱われた。そのため、婚姻に関する親の同意の強制の法律化は遅れ、*Alan Macfarlane* によれば18世紀に至るまで親の同意のない結婚も合法とされた。⁹⁾ 当然ながら、人目を忍んで結婚する男女の数は増える一方で、プロテスタント説教者は、こうした秘密結婚に対して常に警鐘を鳴らし続けた。例えば、当時ロンドンで人気の高かった聖職者 *William Gouge* は、結婚を “a kind of publike action”、対する秘密結婚を “such as are made in priuate houses, or other secret places . . . or in the night time” と定義した上で、秘密結婚の破滅性を次のように示している。“As such seeking of secrecie taketh much from the honour and dignitie of mariage, so it implieth some euill cleauing thereto . . . There is little hope that such mariages should haue any good success.”¹⁰⁾ *Priscilla* と *Æmylia* の災難は、*Spenser* が、秘密結婚を不吉なものとしてそれがもたらす危険を強調したエリザベス朝社会の極めてオーソドックスな結婚観を有していたことを示していると言えよう。

さらに注意すべき *Priscilla* と *Æmylia* のエピソードの共通点は、女性の方が相手の男性より社会的に上の階級に属すること、及び二人とも逢引の最中に暴行・拉致の危機に見舞われることである。¹¹⁾ この2点は密接に関係しており、ルネサンス社会における上流階級の女性が秘密結婚に対して抱いていた恐怖感を表している。結婚とそれに続く出産は、富の伝達の重要な媒介手段であり、結婚前の女性の処女性と貞操は、家督の正当な継続のために過度ともいえるほど厳重に守られた。処女性は、結婚市場 (marriage market) の重要な資本であった。貞節に関しては明らかに二重標準 (double standard) が存在し、結婚前の男性が性生活の自由を謳歌したのに対して、

女性のいわゆる不身持はゆゆしい罪悪であった。¹²⁾ したがって、女性の社会的身分が高ければ高いほど、秘密結婚はいわば自分の貞操を賭した危険な賭であった。また、それは絶えず財産目当ての誘惑や誘拐の危機をはらんでいた。¹³⁾ 現実にもそうした事件は多く、16 世紀には、貴族の一人娘と誘拐紛いに秘密結婚する者を手助けした牧師を厳罰に処す法律が定められたほどである。¹⁴⁾

恋人との密会に赴いた女性が貞操の危機にさらされるという筋立ては、秘密結婚に対する考えの別の重要な側面を表している。Æmylia は、待合せの場所で恋人ではなく「情欲」に出くわし、Priscilla も Aladine と「愛の楽しみに耽っている」*'in ioyous iolliment / Of their franke loues'* (VI. ii. 16) 最中、好色な騎士に出会う。道徳的寓意としてこれらのエピソードを解釈すれば、彼らの恋愛自身が肉欲の犠牲になっていることがここで示唆されているものと考えられる。プロテスタントは、秘密結婚、とりわけ若い男女のそれを性欲のみに駆り立てられた関係と見なした。プロテスタント同様、秘密結婚に対して強い嫌悪感を示した Erasmus は、こうした結婚を、性欲に基づく盲目的な愛という点では姦通と何ら変わるところはないとして、徹底的に糾弾した。¹⁵⁾ 実際、プロテスタントの婚姻観において秘密結婚は姦淫 (fornication) と同罪として扱われたのである。

George E. Rowe は、Priscilla と Aladine が密会する森を世間の邪惡に対する逃避地と捉え、二人の愛を乱す無法な騎士は “negative publicity” を象徴するものと解釈している。¹⁶⁾ 確かに、礼節をわきまえずに他人の恋を邪魔する騎士に詩人の批判がこめられているのは間違いない。しかし以上見てきたように、森は安らぎの空間というよりはむしろ恐怖や危険と隣合わせの場所であり、Priscilla と Aladine の恋愛のありかたそのものも疑問視されていることは否定し難い。

Spenser は、第 6 巻の冒頭で「礼節とは宮廷に由来した言葉であるように思える」(*'Of Court it seemes, men Courtesie doe call'*) (VI. i. 1) と述べ、礼節と宮廷作法を結びつけている。宮廷愛 (courtly love) の価値観に

においては、プライバシーや秘密は、言わば恋愛の基本条件であった。¹⁷⁾ 秘めた恋心こそ高尚であり、自分の恋を公けに吹聴するような言動は恥ずべき行為であった。12世紀のフランス、Poitiersの宮廷で生活し、その恋愛観を *The Art of Courtly Love* として著した Andreas Capellanus は、31箇条の宮廷愛の原則を記しているが、“When made public love rarely endures.” をその条項に含め、恋愛のプライバシーを評価している。¹⁸⁾ しかし、恋愛における public/private の問題に関する Spenser の認識は、宮廷愛の伝統からは大きく逸脱したものであったと言えよう。隠すという行為が他人の妬みや誤解の原因になり得る危険性、現実の宮廷に渦巻く中傷の罟を詩人は常に意識していたように思える。そして、廷臣の結婚を過度に嫌ったエリザベス一世の宮廷では、まさに秘密結婚が頻繁に行われた。Earl of Leicester、Earl of Essex、そして Sir Walter Raleigh と、Spenser のパトロン達が揃って秘密結婚をし、そのために女王の寵愛を失っていることは注目し値する。次章では、Raleigh の秘密結婚を取り上げ、それを寓意化した第6巻の Serena のエピソードを考察する。

II

Priscilla と Aladine は、Calidore と Tristram により災難から救われる。無法な騎士は殺され、Calidore は Priscilla を手伝い、傷ついた Aladine を彼の家まで運ぶ。しかし、Priscilla の苦悩はこれで終わったわけではない。重傷を負った恋人の身を案じる Priscilla であるが、実はそれ以上に自分の評判を失うのを恐れている。父親に隠れて恋人と密会している最中に襲われるという不幸な出来事により、「自分の評判は一体どうなるものやらと考えては」‘With thinking to what case her name should now be brought’ (VI. iii. 6) ため息をつくのである。加えて、Aladine の看病に一夜を費やした以上、家に帰らなかった理由を父親に何と説明したものかという問題も生じてくる。思い余った Priscilla の相談を受けた Calidore

は、彼女を父親の家まで送り届けることを約束する。そして、Priscilla が「純潔で、何のやましいところもない」‘Most perfect pure, and guiltlesse innocent’ (VI. iii. 18) ことを証明するために、先に彼女を辱めようとした騎士の首を父親に見せる。

ここで社会的背景となっているのは、秘密結婚は絶えず^{スキャンダル}醜聞の格好の話題となったことである。しかも、前に述べた処女性に関する二重標準のため、それが女性にとってより深刻な問題であったことは言うまでもない。プロテスタントもこの点を憂慮しており、例えば、秘密結婚には理論的には反対であった Luther が、既に性的交渉を持ったカップルにはそのまま結婚するように説いたのは、女性が^{スキャンダル}醜聞の犠牲になるのを防ぐためであった。¹⁹⁾ 結婚前に処女を失った女性、とりわけ妊娠した女性は、世間の批判と好奇の目にさらされたのである。Priscilla の苦悶、Calidore の気配りは、こうした当時の社会事情を反映しているものと思われる。

Priscilla の処女性に関する Calidore の弁明がはたして真実であるか否かはともかく、彼女の名誉とプライバシーを重んじる Calidore の礼節が、詩人の賛美の対象になっていることは間違いない。Priscilla は、Calidore の宮廷人特有のレトリックにより“the wall of private life”の背後に安全にかくまわれる。²⁰⁾ しかしもちろん、これは必ずしも、詩人が恋愛の秘密性を高く評価したことを意味するわけではない。秘密恋愛に対する Spenser の道徳的立場は、むしろその危険性の認識に見られる。詩人は、秘密結婚と^{スキャンダル}醜聞という主題をすぐ後に続く Serena のエピソードで再び取り上げ、社会を無視して恋愛のプライバシーに固執することが招く問題を改めて読者に喚起するのである。

Priscilla を無事に家まで送り届けた Calidore は、妖精の女王に命じられた「かしましい獣」(Blatant Beast) 退治の探求を続けるが、再び一組の恋人達に出会う。Calidore は、Serena と Calepine が「人目につかぬ木陰で」‘In couert shade’ (VI. iii. 20) 休息しているところへ偶然来合わせる。ここで注意しておきたいのは、隠れた場所で愛を楽しむ恋人達が他人に

邪魔されるという設定が繰り返されていることである。そして、Calepine も Aladine 同様、武具を脱いだ姿で登場する。後に、Pastorella との恋に落ちた Calidore が武具を脱いで牧人の衣服をまとうことに象徴されるように、武具は男性の公的社会を表し、私生活を表す女性との恋愛と対比されている。²¹⁾ Calidoreは、知らずにとはいえ二人の楽しみの邪魔をしたことを詫び、騎士 Calepine と語らい始める。一方、二人が話している間、Serena は「悪意や恐ろしい危険が潜んでいるかもしれぬという懸念は少しも抱かず」‘Without suspect of ill or daungers hidden dred’ (VI. iii. 23)、野にさまよい出る。すると、突然森の中から百の舌を持つ怪物「かしましい獣」が飛び出し、Serena をくわえて走り去る。Serena は、悲鳴を聞いて駆けつけた Calidore と Calepine に救出されるが、獣に両脇を噛まれて瀕死の重傷を負う。

このエピソードが Raleigh と Elizabeth Throckmorton の秘密結婚の歴史的アレゴリーであることはよく知られるところであるが、この事件に関する資料は比較的乏しく、Elizabeth の兄 Sir Arthur Throckmorton の日記が最も正確な手がかりとされている。²²⁾ 1591年の後わり頃、Raleigh はエリザベス女王の女官 (Maids of Honour) の一人、Elizabeth Throckmorton と秘密裡に結婚する。Sir Arthur Throckmorton は、11月19日に初めて妹の結婚の事実を知らされている。そして、翌年3月29日、Elizabeth は男児を出産する。Elizabeth は、出産後、おそらく4月後半に再び宮廷に伺候するが、5月に二人の結婚は女王の知るところとなる。寵臣が内密に結婚していたこと、そして既に子供まで設けていることに激怒した女王は、二人を宮廷から追放し、ロンドン塔に監禁する。

Spenser は、友人のこの事件を先ず第3巻で取り上げ、エリザベス女王を表したものとされる Belphoebe の、従者 Timias に対する誤解と不興、追放された Timias の苦悩、そして二人の和解を描いた一連のエピソードを書いている。William A. Oram が指摘するように、Raleighの秘密結婚のアレゴリーは、“relation between courtship and sexuality, public

function and private love” に対する Spenser の一貫した興味を示している。²³⁾ 批評家達の関心は、女王とRaleighの関係に集まる傾向があり、それを主題とした第3巻の Belphœbe と Timias のエピソードの解釈が盛んであるのに対し、Serena と Elizabeth Throckmorton との関連の研究は従来あまり行われてこなかったように思われる。²⁴⁾ ちょうど Elizabeth Throckmorton が歴史の蔭に隠れているように、Serena もまた Spenser 批評史においては日の当らぬ存在であった。しかし、Serena はまさに Raleigh がその詩の中で妻につけた名前であり、²⁵⁾ 中傷のアレゴリーである「かしましい獣」の犠牲になるのが、詩全篇を通じて Timias と Serena の二人だけであることなどを考慮しても、このエピソードは、Raleigh と Elizabeth の秘密結婚が二人にもたらした苦難、即ち宮廷の醜聞^{スキャンダル}と中傷に焦点を当てている点で興味深い。

Raleigh の秘密結婚に対する Spenser の道徳的立場の曖昧性は、常に批評家達によって指摘されてきた。²⁶⁾ これはまさに、パトロンに依存するところの大きかった宮廷詩人の苦慮を表している。*The Faerie Queene* は、エリザベス女王に捧げられたものとして出版され、巻頭には女王への献呈の言葉が付された。一方、1590年に前半の3巻が出版された時は、詩人が Raleigh に宛てた手紙が巻末に載せられている。この二人のパトロンが争うという状況にあって、どちらか一方を支持することは禁物であり、Spenserにとって何より重要であったのは一またこの事件を寓意化して出版した最大の目的は二人の仲を修復することにあっただろう。

この結果、第6巻における Serena の災難の扱いは、非常に微妙なものとなっている。上に述べたエピソードでは、一見 Serena は「かしましい獣」の被害者であるように思われる。つまり、Raleigh と Elizabeth Throckmorton に寄せる詩人の同情がここで示され、二人は中傷の犠牲者として弁護されている。しかし同時に、Serena の秘めた恋が非難の対象になっていると見ることも可能である。これは、Calepine とはぐれた Serena が偶然出会った Timias と共に隠者を訪れる場面に最もよく表れている。

隠者は、二人が「かしましい獣」に受けた重傷を治療する唯一の方法として、次のような忠告を与える。

Abstaine from pleasure, and restraints your will,
Subdue desire, and bridle loose delight,
Vse scantied diet, and forbear your fill,
Shun secresie, and take in open sight:
So shall you soon repaire your present euill plight.
(VI. vi. 14)

前半の3行で説かれる中庸の精神は、宮廷愛の伝統にも見られる教訓であるが、²⁷⁾ 内緒事を避けるようにとの忠告は、先に述べたように、恋愛のプライバシーを重んじた宮廷愛の価値観とは完全に異なる。これはむしろ、公然な男女関係を主張したプロテスタントの恋愛観を示している。

Serena が快楽に耽けたことをとがめられている点も重要である。Raleigh と Elizabeth Throckmorton の秘密結婚が、他の宮廷人による同様の事件よりもさらにスキャンダラスであり、またより厳しく罰せられた理由の一つに、結婚と Elizabeth の妊娠が重なったことが挙げられる。Raleigh の初期の伝記作家達の間では、Elizabeth は結婚する前に不義の子供を出産していたとする説が有力であった。²⁸⁾ 妊娠・結婚の前後関係の真偽のほどは明らかではないが、秘密結婚が性的な側面から^{スキャンダル}醜聞の的になりやすかったことは先に述べた通りである。Ann Rosalind Jones は、宮廷女性の心得を説いた16世紀の礼儀作法書の研究の中で、宮廷婦人、とりわけ maids of honour と呼ばれる女官達の貞節が、彼女達が仕える女王の評判に影響を及したことを書いている。²⁹⁾ 当時は、女性の名誉 (honour) は貞節 (honesty) と同義であった。純潔の象徴として崇められ、宮廷の風紀にもとりわけ敏感であったエリザベス女王が、女官の不祥事に激怒したことは想像に難くない。

隠者のもとの傷を癒した Serena は、別れたままになっている恋人

Calepine 探索の旅を続ける。我身の不運をひとしきり嘆き、自分を置き去りにした恋人への恨み言を述べた後、旅の疲れから Serena は深い眠りにつく。するとその近辺に住む食人族が現れ、Serena を先ず自分達の神への生にえとして捧げてから、皆で食べるということを決定する。野人達の司祭は聖なる儀式の準備にとりかかる。

The Priest him selfe a garland doth compose
Of finest flowers, and with full busie care
His bloody vessels wash, and holy fire prepare.

(VI. viii. 39)

Serena が目を覚ますと、食人族は歓喜の叫び声を上げ、彼女の服を剥ぎ取る。鳴き叫ぶ Serena の裸身が淫乱な野人の前にさらされる。

Her yuorie necke, her alabaster brest,
Her paps, which like white silken pillowes were,
For loue in soft delight thereon to rest;
Her tender sides, her bellie white and clere,
Which like an Altar did it selfe vprere,
To offer sacrifice diuine thereon;
Her goodly thighes, whose glorie did appeare
Like a triumphall Arch, and thereupon
The spoiles of Princes hang'd, which were in battel won.

(VI. viii. 42)

この場面は、明らかに祝婚歌 (epithalamium) のモチーフのパロディになっている。司祭が準備する聖なる炎は、ローマの結婚式の習慣に由来し、Spenser は同様のイメージを第1巻の巻末で描かれる Red Cross Knight と Una の婚約式の場面で用いている。同様に花輪もまた、詩人が花嫁を描写するのに特に好んで用いたイメージである。³⁰⁾ すぐ上で引用した Serena の裸体の描写が、中世からルネサンス期にかけて祝婚歌の手本とされた聖書

の Song of Solomon の模倣であることは、繰り返し批評家達によって指摘されている。³¹⁾ このすぐ後に、食人族の角笛が「森をその音で震わせる」‘made the wood to tremble at the noyce’ (VI. vii. 46) が、結婚を祝う人間の歓喜に呼応して丘や森がこだまする様子に言及するのは、古典的祝婚歌の常套であった。³²⁾ 「全ての森が応え、そのこだまは鳴り響く」‘all the woods shal answer and theyr eccho ring’ は、Spenser の *Epithalamion* の有名なりフレインである。

A. C. Hamilton は *The Faerie Queene* の註釈の中で、このエピソードを “the sexual phantasies of a woman in love” と解釈し、Serena が捧げられる祭壇は新婚の床を表しているとしている。たしかに、Serena は「深い眠りに落ちている」‘drowned in the depth of sleepe’ (VI. vii. 36) ところを食人族に襲われ、全ての暴挙は闇の中で行われる。食人族による暴行を、Serena の心理が作り出した一種の夢想と見ることは十分可能であるように思われる。ここで当然、食人族によって全裸にされるという特異な悪夢となって現れる Serena の恐怖とは一体何に対して向けられたものであったのか、という疑問が生じてくる。Catherine Bates は、祝婚歌は、新婚初夜の花嫁の叫び声を祝宴客の喚声でかき消し、“ritualize (even institutionalize) aggressive physical mastery over the female body” という目的を元来有していたと述べている。³³⁾ とすれば、Serena が儀式的に全裸にされ、その叫びが彼女を取り囲んだ野人の声に圧される擬似祝婚歌風の場面は、性交渉という男女関係の最も私的な部分までも公にする結婚式に対して女性が抱く、不安と恐怖を劇的に表現していると言えよう。

食人族を、加害者としてのみではなく Serena の妄想として解釈すると、道徳的アレゴリーにおいて Serena が果たす役割は、極めて曖昧なものとなる。「かしましい獣」に噛まれた Serena は ^{ゴシップ} 噂の犠牲者のように見えるが、隠者の忠告は彼女の恋愛の秘密性をとがめているようにもとれる。同様に、Serena を襲う野人は ^{スキャンダル} 醜聞の具象化されたものだが、一方で Serena のプライバシーへの執着、公的社会への過度の恐怖が問題視されているとも言え

る。Serena は、間一髪のところで Calepine に救われるが、裸身であることを恥じて、恋人に名乗ることはおろか礼すら言おうとしない。“she must learn that a truly courteous person looks at the things from other people's points of view, not simply for her own”と、Serena の社会的配慮に欠ける自己中心性を指摘する批評家もいる。³⁴⁾

私が知る限り、Serena と食人族のエピソードを Raleigh の秘密結婚との関連で解釈した研究はなかったように思う。しかし、Raleigh が妻につけた Serena という名、そして食人族というキャラクターから、エリザベス女王の宮廷の人々が連想した人物は唯一人であったろう。Raleigh は当代一の探検家であり、食人族に関する考察も残している。Spenserは、Serena を襲う食人族を「冒険的な取り引きにより栄えることもせず、貧しい人々の労力に寄生する」‘ne did giue / Them selues to any trade . . . Or by adventurous marchandize to thriue; / But on the labours of poore men to feed’ (VI. viii. 35) と描写している。これは、宮廷人に対する痛烈な皮肉にも聞こえ、“aduenturous marchandize” は数々の航海、冒険で身を成した Raleigh への賛辞ととれる。³⁵⁾ 恋愛をめぐる公私の葛藤に対して Raleigh が取った行動は、プライバシーを社会から完全に切り離すことであった。しかし、本論で見てきたように、社会とのバランスを欠いた恋愛・結婚に対して、Spenser は一貫して懐疑的、むしろ否定的ですらあったと言えよう。

結 び

Sunne of the world, great glory of the sky,
That all the earth doest lighten with thy rayes,
Great Gloriana, greatest Maiesty,
Pardon thy shepheard, mongst so many layes,
As he hath sung of thee in all his dayes,
To make one minime of thy poore handmayd,

And vnderneath thy feete to place her prayse,
That when thy glory shall be farre displayd
To future age of her this mention may be made.

(VI. x. 28)

第6巻のクライマックスであるColin Clout のヴィジョンの締めくくりは、public と private の融合—Donald Cheney の言葉を借りれば—“conjuring up his private lady in the midst of the poem’s public landscape” になっている。³⁶⁾ 詩人の persona である Colin は、自分の恋人を賛美したことに対して、エリザベス女王の許しを請う。詩人の恋人の名は言及されず、それはあくまでアレゴリーとして隠されている。しかし「偉大なる」Gloriana、エリザベス女王に捧げた叙事詩という public な詩の中に、Spenser はこうしてその私の部分を織り混ぜるのである。

註

- 1) 婚姻に関する中世の教会法見地、及び秘密結婚をめぐるプロテスタントの改革に関する記述については、以下の資料を参照。Steven Ozment, *When Fathers Ruled: Family Life in Reformation Europe* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1983) 25-44; Jack Goody, *The Development of the Family and Marriage in Europe* (Cambridge: Cambridge UP, 1983) 146-153; James A. Brundage, *Law, Sex, and Christian Society in Medieval Europe* (Chicago: U of Chicago P, 1987)
- 2) Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (London: Weidenfeld, 1977) 32.
- 3) Philippe Ariès, “Love in Married Life” in *Western Sexuality: Practice and Precept in Past and Present Times*, eds. Philippe Ariès and André Béjin, trans. Anthony Forsten (Oxford: Basil Blackwell, 1982) 137.

- 4) Harry Berger Jr., "A Secret Discipline: *The Faerie Queene*, Book VI" in *Revisionary Play: Studies in the Spenserian Dynamics* (Berkeley: U of California P, 1988) 217; Richard Helgerson, *Self-Crowned Laureates: Spenser, Jonson, Milton, and the Literary System* (Berkeley: U of California P, 1983) 79.
- 5) Robin Headlam Wells, "Spenser and the Courtly Tradition: Form and Meaning in the Sixth Book of *The Faerie Queene*," *English Studies* 58 (1977): 221-229.
- 6) Theresa Marie Krier, *Gazing on Secret Sight: Spenser, Classical Imitation, and the Decorums of Vision* (Ithaca: Cornell UP, 1990) 222-240; George E. Rowe, "Privacy, Vision and Gender in Spenser's Legend of Courtesy," *Modern Language Quarterly* 50 (1989): 309-336.
- 7) *The Faerie Queene* からの引用は、A. C. Hamilton, ed., *The Faerie Queene*, Longman Annotated English Poets (London: Longman, 1977)による。
- 8) Mark Rose, *Heroic Love: Studies in Sidney and Spenser* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1968) 131n.
- 9) Alan Macfarlane, *Marriage and Love in England: Modes of Reproduction 1300-1840* (Oxford: Basil Blackwell, 1986) 124-128.
- 10) William Gouge, *Of Domesticall Duties: Eight Treatises* (London, 1622) 204-205.
- 11) 第6巻のヒロイン Pastorella の母親 Claribell も、隣国の王との婚姻を望む父親に隠れて、貧しい騎士と秘密結婚をする。
- 12) Keith Thomas, "The Double Standard," *Journal of History of Ideas* 20 (1959): 195-216.
- 13) Constance Jordan, *Renaissance Feminism: Literary Texts and Political Modes* (Ithaca: Cornell UP, 1990) 65.
- 14) C. J. S. Thompson, *Love, Marriage and Romance in Old London* (London: Heath Cranton, 1936) 98.
- 15) Constance Jordan, 60n.

- 16) George E. Rowe, 319-321.
- 17) Alexander J. Denomy, "Courtly Love and Courtliness," *Speculum* 28 (1953): 61-62.
- 18) Andreas Capellanus, *The Art of Courtly Love*, trans. John Jay Parry (New York: Norton, 1969) 185.
- 19) Steven Ozment, 32-35.
- 20) George E. Rowe, 321.
- 21) 男性と公的領域、女性と私的領域という伝統的な連関については、Joan Kelly-Gadol, "Did Women Have a Renaissance?" in *Becoming Visible: Women in European History*, eds. Renate Bridenthal and Claudia Koonz (Boston: Houghton Mifflin, 1977) 参照。
- 22) 以下の記述は、A. L. Rowse, *Raleigh and the Throckmortons* (London: Macmillan, 1962) 150-169による。
- 23) William A. Oram, "Spenser's Raleighs," *Studies in Philology* 87 (1990): 356.
- 24) Timias と Belphœbe のエピソードにおける Raleigh の秘密結婚のアレゴリーの研究に関しては、先に引用した William A. Oram 以外に、例えば Michael O'Connell, *Mirror and Veil: The Historical Dimension of Spenser's Faerie Queene* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1977) 114-124; Judith H. Anderson, " 'In Liuing Colours and Right Hew': The Queen of Spenser's Central Books" in *Poetic Traditions of the English Renaissance*, eds. Maynard Mack and George deForest Lord (New Haven: Yale UP, 1982) 47-66; James P. Bednarz, "Raleigh in Spenser's Historical Allegory," *Spenser Studies* 4 (1983): 49-70 参照。
- 25) Walter Oakeshott, *The Queen and the Poet* (London: Faber, 1960) 96n.
- 26) Michael O'Connell, 118; James P. Bednarz, 61-68.
- 27) Alexander J. Denomy, 57-63.
- 28) この説は、Fred Sorensenにより否定されている。Fred Sorensen, "Sir Walter Raleigh's Marriage," *Studies in Philology* 33 (1936): 182-202.

- 29) Ann Rosalind Jones, "Nets and Bridles: Early Modern Conduct Books and Sixteenth-Century Women's Lyrics" in *The Ideology of Conduct: Essays on Literature and the History of Sexuality*, eds. Nancy Armstrong and Leonard Tennenhouse (New York: Methuen, 1987) 43-44.
- 30) Alastair Fowler, *Conceitful Thought: The Interpretation of English Renaissance Poems* (Edinburgh: Edinburgh UP, 1975) 61-68 参照。
- 31) *Variorum Edition*, eds. Edwin Greenlaw et al. (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1932-1945) vol. 6, 234-235.
- 32) Virginia Tufte, *The Poetry of Marriage: The Epithalamium in Europe and its Development in England* (Los Angeles: Tinnon-Brown, 1970) 59-60.
- 33) Catherine Bates, *The Rhetoric of Courtship in Elizabethan Language and Literature* (Cambridge: Cambridge UP, 1992) 143.
- 34) Walter F. Staton Jr., "Italian Pastorals and the Conclusion of the Serena Story," *Studies in English Literature* 6 (1961): 42.
- 35) Donald Cheneyは、このエピソードに見られる Boiardo の影響を指摘し、食人族が "parody of civilized society" であると述べている。Donald Cheney, *Spenser's Image of Nature: Wild Man and Shepherd in The Faerie Queene* (New Haven: Yale UP, 1966) 104-105.
- 36) Donald Cheney, "Spenser's Fortieth Birthday and Related Fictions," *Spenser Studies* 4 (1983): 25.